

* 《連載》人とことば *

日米戦争中のハワイ大学で ドナルド・キーンが学んだ日本現代文学

一 菊池寛「勝敗」の感想文と教師、上原征生^{めくお}—



河路由佳

1. はじめに

日本文学者ドナルド・キーンが初めて出会った日本文学は、アーサー・ウェーリによる『源氏物語』の英訳であった。その作品世界に魅了されてキーンが日本語を学ぼうと志したことは、自伝ほか随所で語られている。

そして、初めて日本語で日本文学を読んだのは、海軍日本語学校で学んだ長沼直兄による『標準日本語読本』(1931-34)の中の芥川龍之介「くもの糸」や菊池寛「父帰る」「時の氏神」などであった(キーン、河路 2014, p. 89)。

11 か月の学習で『標準日本語読本』の巻六までを終えて、ハワイの真珠湾に赴いたキーンは、軍務の傍らハワイ大学の日本文学の授業に参加した。教師は上原征生^{めくお}(1905-1998)で、毎週、課題の小説を読んでは感想文の提出が課せられた。キーンはこの授業を通して日本語で文学を読む自信がついたと語っている(キーン、河路 2014, pp. 148-149)。

その中の菊池寛「勝敗」についてのキーンの感想文が、このほど見つかった。上原が添削している。本稿ではこれを紹介し、日米戦争中のハワイ大学での日本文学の授業の一端を明らかにする。また、1930年代から70年代にかけてハワイの日系人受難の時代を通してハワイ大学で日本語、日本文学を担当した上原征生の生涯を辿り、その仕事に思いを致す。

2. ハワイ大学における日本語・日本文学

ハワイ大学は、日本語、日本学のエデュケーションの歴史が古く、質量ともに充実していることで知られる。1907年に農科大学として生まれ、1920年に文学部を備えたハワイ大学における日本学は、1920年に元同志社大学長の原田^{たすく}助が招聘され、1931年まで日本語・日本歴史・日本文学を担当したのが最初であるという。日本語が文学部の必須外国語の一つとされたのは、全米大学中最初の例であらうと上原(1975)は書いている(p. 90)。その後、国友忠夫が1929年から1937年、上原征生が1933年から1971年まで日本語・日本文学を担当した。戦争中の常勤教員は上原一人だったようである。

ハワイ大学には日本語図書を多く備えた「東洋文庫」がある。日本語図書は、ハワイ大学の募集に応じて国際文化振興会や有志からの寄贈のほかハワイ図書館の伏見宮記念奨学会文庫、西本願寺今村文庫を譲り受けて整えられた¹⁾。伏見宮記念奨学会文庫は、1907年にハワイを訪れた伏見宮親王を記念する伏見宮記念奨学会が有志に寄贈を募ったもので、ハワイ図書館の一室に置かれていた。中国語図書などをあわせて1940年に「東洋文庫」となり、日本語図書の数は1941年の「ハワイ大学東洋学部和書目録」では数万部、1970年当時は約10万冊に上っていた(上原 1975, p. 90)。

キーンらの「日本文学」の授業で使われたのは、この東洋文庫であったと考えられる。日系人からの寄附によるため、多く読まれた本は多く集まる。履修者の数だけ副本のあるものが、課題に選ばれたということである。

3. キーンに参加したハワイ大学の日本文学の授業

3-1. ドナルド・キーンによる回想

ドナルド・キーンは、週に一日の休暇を半日ずつ二回に分け、ハワイ大学で日本文学の授業に参加した。海軍日本語学校を1943年1月に卒業後ハワイに赴いたキーンは、同年5月から9月にかけてアッツ島、キスカ島、アダク島の戦場で苛酷な任務に就いたあと再びハワイに戻って1945年3月まで翻訳や日本人捕虜への尋問などを担当した(キーン、河路 2014)。日本文学の授業に参加したのはこの頃のことである。

授業には海軍日本語学校からの友人で後にコロロンビア大学の同僚となるテッド・ドバリーのほか軍隊の仲間が数名、軍隊に関係のない2、3人の女性もいた。1学期は毎週、上原が選んだ現代小説を読み感想文を書いた。キーンにとつて長い小説の多読は初めての経験であった。武者小路実篤の「友情」や谷崎潤一郎の「蓼食う虫」や菊池寛の小説などが課題に選ばれた。

1学期に自信をつけたキーンらは、2学期に『標準日本語読本』で文語文いと訴え、難しいとためらう上原を説得した。『標準日本語読本』で文語文法を学んだキーンらにとつても平安時代の文学の読み解きは困難を極めたが、努力して「桐壺」の巻を読み終えることができた。キーンにとつて軍務の合間の「一番楽しい時間（キーン、河路 2014, p. 151）」であったという。

3-2 菊池寛「勝敗」とキーンの感想文

このほど見つけたのは、菊池寛（1888-1948）の通俗小説「勝敗」の感想文である。「勝敗」は、東京朝日・大阪朝日新聞に1931年7月25日から12月31日まで連載された長編で、翌1932年1月に新潮社から刊行された。貴族院議員子爵若江高道の死によって引き起こされた娘鳥子と、妾腹の姉妹、町子、美年^{ミネ}との確執を描くもので、美しい姉妹の悪意に満ちたかけひきの「勝敗」が、新聞小説としての眼目となっている。町子は鳥子の遠縁の健二を恋人にし、妹、美年に鳥子の婚約候補者藤川を誘惑せよとけしかける。

健二は「マルキシスト」で、町子が得た仕事は「左傾の理論家」瀬川の口述筆記である。瀬川は町子に「資本主義が爛熟して、その中から次の時代が生まれる」と説き、健二は「新しい時代が早く来るやうに、努力することだ」と語り、町子はその情熱に感銘を受ける。

健二が特別高等警察に捕まると町子も連行され、苛酷な尋問を受けるうちに精神に異常をきたし病院に移される。それをあざ笑おうと訪れた鳥子は、町子の様子を見て心改めて美年子に詫び、美年子はそれを受け入れる。

最後の仲直りは唐突だが、双方の醜い戦いに疲れ読者はほっとしたことだろう。キーンらが読んだ時期は、この小説が書かれてわずか10年余りの頃であったが、戦争に至った日本、また菊池寛の身辺の変化は大きかった。

菊池寛は1928年の第一回普通選挙で社会民衆党から立候補し、惜しくも

落選した。新しい有権者の「読書階級」²⁾に期待し、国家権力に対抗しようとしたのだった。しかし、日本が国家総力戦体制を強化してゆくにつれて、日本文学報国会設立総会議長、大東亜文学者大会日本代表（1942）と国家的役割を次々に引き受け、1943年には、大東亜文学者大会議長を務めた。

戦後、GHQはこうした活動を戦争協力とみなし、1947年10月に公職追放の指令を受けた菊池寛は、無念のうちに翌年3月、59歳で急逝する。

戦争中のハワイで、ドナルド・キーンは「勝敗」をどう読んだのだろうか。次にキーンによる感想文の全文を漢字の字体もそのままに写して示す。原文は横書きノートを縦に1行おきに使って1行約20字、24行が2ページにわたって鉛筆で書かれている。そこに、上原征生が黒インクで添削している。ここでは、添削を受けた部分を太字ゴシックで示し、添削内容を山かっこに入れて示す。行がえの際の一字下げを行わないのも原文通りである。

勝敗

始めの三百頁を見ると「勝敗」〈字形を修正〉は普通の所謂「小間使文學」の一例に過ぎないと思はれ勝ちであるが、〈〉急に其の映畫に相應しい筋が複雑になつて意外に面白くなるのである。

作の始め部分の傾向から推定すれば其の終りに當りて町子と健二の結婚、そして鳥子と藤川の相互の幸福なき生活が見える。然し乍らそういう平凡な話は急に変な様になる。

町子（は）〈の、が〉自分の鳥子に對して〈の〉憎悪と嫉妬の餘りに美年子を傀儡にして鳥子から藤川を奪（は）させ〈字形を修正〉ようとした時から本作は心理的描写になる譯である。

町子の發狂したことは其の時から段々明かになる。監獄の中にマクベス夫人の如く氣違ひて顔を洗ふのは傾向の最後の結果〈字形を修正〉と見られてもいゝ、それで鳥子は前の仇は亡くなる様になつてほんの人形しか残らず（？）に居たの⑤（を）悟つてから自分の積んだ憎悪が消えたのである。

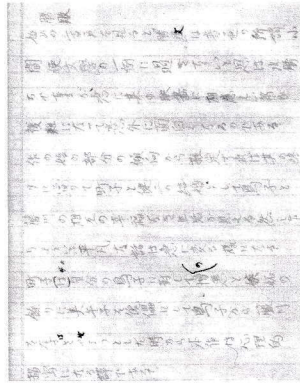
私にとつて共產主義者と其の巡査から受けた虐待の描写は作⑥〈中〉一

番趣味[㊦]ある点であった。著者（は）〈が〉露骨に〈は〉同情しならずに〈い〉にもかゝらず、若い共産主義者の斗争の困難を間接に其の希望の意味迄書いたことに吃驚した。

3-3. キーンの感想文の考察

キーンはこの感想文で「勝敗」を「所謂「小間使文學」」ではないと書いている。姉妹の母親は「若様と小間使の純愛」だとあり、こうした関係性を軸に展開される大衆文學の典型を「小間使文學」と呼んだものである^㉓。町子の発狂の描写にマクベス夫人を想起するあたりは東西の作品に通じたキーンの面目躍如である。最後の場面は、町子が「人形」、すなわち姿だけを残してかつての憎しみ滾る人格は失せ、もはや鳥子の敵ではないのを見て、鳥子の心の憎しみも消えたと解釈を加えている。

特筆すべきは最後の段落で、共産主義者と巡査の場面を一番「趣味がある」すなわち、関心の持たれるところだと述べていることである。キーンはハワイの捕虜收容所で堀川譚に尋問した際に、日本は天皇制を捨てて民主的な国家になるべきではないかと議論をふっかけ「幾分か左翼青年であつたらしい（堀川 1980, p. 89）」との印象を残している。堀川自身も左翼思想に共感を持ち、1940年には警察に勾留されたことがあるが、キーンはそれと同情的であった。キーンは菊池寛が「共産主義者の希望の意味迄」描いたことに驚いている。戦後、進駐軍は民主化政策により戦争中拘留されていた社会主義者らを解放したものの、労働運動が激化し共産党の勢力が伸びると、徹底的な共産主義者排斥（レッドパージ）を行う。菊池寛の受難は深かった。



ドナルド・キーンによる菊池寛「勝敗」の感想文。鉛筆で書かれた原稿に、上原征生が黒いインクで添削した跡が見える。2枚のうちの1枚目、冒頭部分。

3-4. 上原による添削とその背景

上原征生による添削は控えめである。キーンの文章がよく書けていたことにもよるが、原文を尊重し、最小限の手を加えるに止めている。わかりにくい箇所には波線を引いて小さな疑問符を書くのみで、コメントは書かない。上原はどのような姿勢でキーンらに向き合っていたのだろうか。

1919年に14歳でハワイに渡った上原は、日英両語の教育を受け、1933年からハワイ大学で日本語を教えていたが、その間、ハワイの日系人の日本語教育には幾多の困難があった。1920年にはハワイ政府が外国語学校取締法を施行して日本語学校に圧力をかけ、日系人の一部はこれを不服として訴訟を起こした。ホノルル教育会は日本の文部省の教科書の使用を控え、1923年、ハワイの日系市民の育成を目的とした『日本語読本』を刊行するなど努力を重ねた。訴訟については、1926年6月に米国大審院による判決で勝訴となり、日本語学校は活気づいた。しかし、日米開戦後は日本語学校の存続はおろか日本語使用そのものが不自由になる。子どもたちは日本語から切り離され、これを境に日系人の日本語能力が低下する。一方、反比例するように軍関係の日本語教育は盛んになった。それが上原の仕事であった。

上原は、日系人から日本語が剥ぎ取られてゆく様を見つめながら、戦争中も教壇に立っていた。上原（1975）は、「米国の学徒も大戦中は勝利を得るため極東及び極東人を（無論日本と日本人を中心に）『分析』することに務めた。戦後は日本進駐行政実行、その他極東における諸問題解決に必要な手段としてますますその研究は盛んになってきた（p. 80）。」と書いている。

また、上原（1955）は、「戦時中における外国語学校の閉鎖あるいは第三世学生数の増加のために」日系学生の日本語能力が下がったことを説明し、戦後の日本文学の授業について、次のように語っている。文中の「…」は河路による中略である。

日本文学の講義は原文参照も時々やるが、根本的には英語による日本文学史の研究である。上代、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸、現代と年代順に分けて文学思潮の検討である。研究科は日本語専攻が大学院で東洋の研究をしている学生を中心としたもので、各人の希望する作家また

は文学形態の探求をしてみよう。[...] 日本語の勉強をしている学生の大多数はもちろん日系人であるが、それ以外の東洋人系、西洋人系の人とも相当にいる。

戦後は、戦争中のキーンらほど日本語能力の高い学生は日系人の中にもいなくなつた。キーンらとの密度の濃い授業は、上原にとってもあの時限りのものだったのではないだろうか。

4. ハワイ大学に於ける日本語教育を支えた上原征生

4-1. 日米開戦前の上原征生

上原征生 (1975) の巻末に18ページに渡る「私の略伝」がある。『ハワイ熊本県人発展史1986』掲載の上原の略歴^[4]も参照し、上原の生涯を辿る。

上原征生は上原秀政、つねの長男として1905年8月9日、熊本県玉名郡に生まれた。父は1908年にハワイに渡って日本語学校教師となり、征生は祖母、母と親類宅に身を寄せた。1919年、征生はハワイに渡り、父が校長を務める日本語学校のあるカウアイ島にいたが、勉学のため1920年9月にホノルルに移り、英語はイオラニ校、日本語は布哇中学校で勉強した^[5]。翌1921年に父が48歳で急逝すると家族はホノルルに移った。布哇中学を首席で卒業した征生はマッキンレー高校に進み1927年に卒業、ハワイ大学に進学した。学業の傍らカイクキ学院で日本語を、夜間は英語を教えて家計を助けた。

ハワイ日本人学生会の1930年の年報に、前年の文学作品大会のエッセイ部門で二位となったハワイ大学生、上原征生の英文のエッセイが全文掲載されている。題は「A "New American's" View of International Peace ("ニューアメリカン"の国際平和観)」で、「我々が戦争を根絶しなければ、戦争が我々を根絶するだろう」とのジェームス・ブライスのことはじめに、国境を越えて伝染病根絶に成功した我々に戦争の根絶ができないはずがない、と訴える国際平和論である。「ニューアメリカン」は奥村多喜衛が「優秀なアメリカ市民を目指す新たな使命をもった日系の若者」という意味で名づけたことばである (吉田2008, pp. 65-66) 第一次世界大戦で深く傷ついた

人々が世界平和を願った戦間期、交差点 (Crossroads) としてのハワイで、日本籍を持つ「ニューアメリカン」上原は平和への使命を持つと自らを位置づけていた。

1931年に卒業し大学院に進んだが、学長の命を受け1933年の新学期から同大学日本語科の講師となり、1936年に歌舞伎研究で修士号を得た。私生活では1937年8月に日系二世の高校音楽教師、春枝と結婚した。

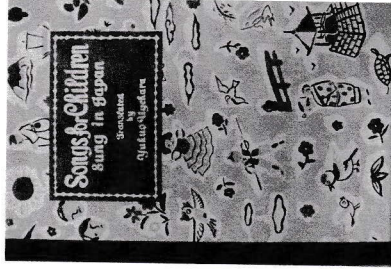
上原は1940年に北星堂から日本の童謡を英訳して『Songs for Children Sung in Japan (日本の童謡)』を刊行した。野口雨情「青い目の人形」、北原白秋「からたちの花」、鹿島鳴秋「浜千鳥」、清水かつら「叱られて」など50の歌詞が収められ、1940年1月付の前書きに、英語圏の子どもたちにも日本の童謡の詩を届けたいと綴っている。上原 (1955)^[6]は、子供は「無技巧で自在」な「詩人」で「民主的な世界人」だと書き、子供が大好きだった。色刷りの挿絵のついた美しい本で、上原の郷愁が溢れている。

4-2. 日米戦争中の上原征生

戦争中のことを上原はほとんど語っていないが、1967年8月17日付ハワイタイムズの「ハワイ大学アジア太平洋学部での親 万年青年・上原 征生教授」という記事^[7]に次のような上原の談話が紹介されている。なお、縦書きの原文を横書きにするにあたって、漢数字を算用数字にして示した。

「太平洋戦争が始まった戦時中は、アメリカは日本と全く逆に日本語学習が盛んになりましてね、軍人を相手に Language Officer Training School の所長にさせられましたよ。皆軍人でしたが、なかなか熱心で、成績も優秀でしたね。彼等の中には除隊後、米国各地の大学で日本語や、日本文学の教授になった人もいますね…。」

その当時に偲ぶように眼が細くなる。



上原征生訳 (1940) 『Songs for Children Sung in Japan (日本の童謡)』(写真は大空社よりの複製版1997より)

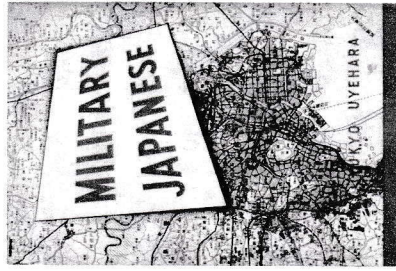
「日本軍が真珠湾をアタックしたあの12月7日はちようど日曜日でしたね、自宅ではぼんやりして過ごしてたんですよ。全くタマゲましたね。とてもホントとは信じられなかつた。それだけにシヨックが大きかつたですわねエ・・・。」

ドナルド・キーンの受けた授業は軍人用のものではないが、同じ時期に教室で出会った軍人には違いない。除隊後日本文学の教授になった筆頭としてキーンを思い浮かべたかもしれない。

1943年、上原は『Military Japanese』というA6判85ページの冊子を著した。Language Officer Training School（語学将校訓練所）で使われたものであろう。カバーは東京の詳細な地図で、皇居を中心とした中心部が表側に、東京西部が裏側に広がっている。やがて東京大空襲の標的となる街である。

本の袖の紹介文に、1941年12月からの特別な職務に応じて、話すことに重点を置き、日本人捕虜や一般市民に質問し、その答えを理解すること、簡単な軍事命令を理解し、使用することを目的とし、最小の時間で学べるように作られたと書かれている。日本語はローマ字表記である。

第1部は17課から成り、「これは鉄砲です」に始まり「位は何ですか。／陸軍少尉です」など軍事関係の例文が目立つ。10課の会話文は「ちよっと、あなたは誰ですか。／ナカムラです。／もうよい、次。／ローマ字であなた名前を書きなさい。ここへ。[...]」どこで捕虜になりましたか。／ひもじいですか。／いいえ。／これまで。」というもので、16課は捕虜に名前や生年、出身地や所属軍隊、家族などの情報を聞く会話、17課は一般市民に対して、名前や家族、仕事などの情報を聞き出す会話である。51ページからの第2部は翻訳通訳の手引きとして元号と西暦の対照表や日本の地図と県名、地図記号の説明などがあり、71ページからの第三部は軍隊用語の英和辞典



Yukuo Uyechara(1943)『Military Japanese (軍事の日本語)』
著者名のYUKUOがYUKYOと印刷されているのは誤りである。

である。

キーンが海軍日本語学校で学んだ長沼直兄の『標準日本語読本』とは違って、軍事に特化した簡便な冊子だが、開戦にシヨックを受けた上原が短期間で書き上げるには、想像を絶する労力を要したに違いない。前書きの日付は1943年2月である。その年4月、上原は待望の娘ミドリを授かった。

キーンらとの日本文学の授業は、上原が情趣溢れる童謡の本に続いて軍事用のマニュアルを書き、父親になったばかりの時期のものであった。

4-3. 戦後の上原征生

1947年、上原は准教授になると同時にアジア太平洋語科長となった。1952年5月に春枝が病死して9歳のミドリと二人暮らしとなり、翌1953年2月にアメリカに帰化した。その年、上原は歌舞伎の「弁天小僧」を英訳（『Benten the Thief』）、公演は好評を博し1963年に再演された。¹⁰¹ Years of Kabuki In Hawaii」という冊子¹⁰²に、傘をかざした白波五人男が花道に勢ぞろいした舞台写真がある。振り付けはアメリカ留学経験を持つ尾上九朗右衛門（1922-2004）であった¹⁰³。この後、九朗右衛門はアメリカに移住してハーバード大学などで歌舞伎を教え、退職後ハワイに移り当地で亡くなった。

小沢編（1972）によると、上原は、1954年3月6日、ハワイ教育会の修身教科書の編纂についての集まりに参加し、日本語学校の教師の要望を受けて、1959年2月から4月にかけて日本語教授法の巡回講習を行う（p. 318）など、日系社会の日本語教育にも力を尽くした。

1962年12月、在外研究中の東京で田園調布中央病院の外科医、壽子と再婚、その後ハワイで共に暮らした。1971年7月に定年退職した上原は、1973年に“Learn Japanese for English speakers”というB6判124ページの教科書を、原田助と国友忠夫の著作、上原征生による改訂として刊行した。原田と国友がハワイ大学で教えていたのは1930年代までのことである。上原はその後長く使った教科書を改めて形にし、ハワイ大学の日本語教育の基礎を築いた二人に敬意を表したようである。1998年10月9日、ホノルルの病院で93歳の命を全うした。

5. キーンと上原の戦後の再会

キーンと上原に戦後再会の機会があったのか、キーン氏に質問したところ、2017年7月14日、キーン誠己氏より電子メールで「初めて会った時は最初の奥さんがいて、その奥さんには会ったことはありませんでした、亡くなりました。二度目の奥さんは外科医で、戦後になって、戦友で親友になったHenry Yokoyamaの家で夫婦で会いました。」との回答を得た。

ヘンリー・ヨコヤマといえ、ホノルルの陸海軍合同情報局で通訳官としてともに働いた仲間、30人ほどいた日系二世の中で最も親しくなったと自叙伝で紹介されている（キーン2014, p. 279）。戦後ヨコヤマは医師となって妻と子ども六人とハワイで暮らし、キーンはハワイへ行くたびに会っていた。

6. おわりに

戦争中のキーンとの文学の授業は、上原にとっても特別なものであったはずだが、上原はそのことを語っていない。後のキーンらの活躍に心動かされたとしても不思議はないが、そうしたそぶりは見られない。キーンが語らなければ永遠に知らなかったかたかもしれない。平和を願う気持ちが一層強かった上原にとって、日米戦はことを絶するもので、祖国を敵として戦う米兵に軍事日本語を教える気持ち複雑でなかったはずがない。キーンの目に「一生懸命で良い先生でした。」^[10]と映った上原の、キーンらとの授業が気高いものであったとしても、語ることはみつからなかったのではなかろうか。

ドナルド・キーンは、2017年1月14日付東京新聞の連載「ドナルド・キーンの東京下町日記」に、発見されたこの読書感想文のことを書いている。ホノルルの陸海軍合同情報局の日系人差別や日系人の強制収容所、日系人部隊の陸軍第四二連隊など、日米戦における日系人の苦難に心を寄せたあと、「戦争は勝敗に関係なく、人々を傷付け、その傷は消えない。」とキーンは記す。こんな中、信頼で結ばれた日本人教師とアメリカ兵が熱心に日本文学に向き合った教室があった。そこで類稀な日本文学研究者ドナルド・キーンが鍛えられ、それが戦後、大きく花開いたのだった。

キーンは自身が「勝敗」の感想文を書いた時代を振り返りつつ、この文章を「争いのない平和こそが勝利である。」という一文で結んでいる。

（日本語教育研究者 博士〈学術〉）

【謝辞】

ハワイ大学時代の感想文の複写、使用の許可をくださいましたドナルド・キーン先生、キーン誠己氏に御礼申し上げます。また、上原征生氏に関する情報の多くは、ウェブサイト「布哇文庫」主宰の浅海伸一氏よりご提供いただき、いろいろご教示いただきました。また、ハワイ日系社会の研究者、鈴木啓氏からも貴重な情報をいただきました。書影の使用につきましては大空社、専修大学図書館にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

●注●

- [1] ハワイ日本人移民史刊行委員会編（1964）には1935年の呼びかけで伏見宮記念奨学会文庫ができたこととあり、上原（1975）では、原田助時代（1920-31）に伏見宮記念奨学会文庫を譲り受けたこととあり、年代に食い違いがある。
- [2] 昭和3（1928）年2月に行われた第一回総選挙への立候補時の菊池寛のポスターに「文芸家にも議席を与へよ・読書階級の人は菊池寛氏を選べ・社会民主党公認候補」と書かれている。
- [3] 井上修一（1995）によると、「小間使い文学」はウィーンの貧しくも魅力的な町娘の登場する大衆文学で、ウィーンの歴史家アントン・H・フォン・ガイザウが1782年に出版した書籍で初めてこの呼称を用いたという。
- [4] 『ハワイ熊本県人発展史1986』の「上原征生」の項を本人が自伝風に書いている。鈴木啓氏より複写をいただいた。
- [5] キーンは、上原は九州生まれで子供のときにハワイに移住したと語った（キーン、河路2014, p. 148）。これを合せてキーンの記憶は驚くほど正確である。
- [6] 1955年に彩光社から刊行された上原のエッセイ集『日系文化』と『ハワイ随筆』の本文は同一である。前者は6月発行の非売品で、後者は7月発行で定価120円とある。1975年の『ハワイの声』には、『日系文化』のほぼ全文が転載され、その後書かれたものが加えられている。
- [7] 鈴木啓氏より複写をご提供いただいた。記事の最後に（牛島）と筆者名が見える。
- [8] "101 Years of Kabuki In Hawaii" Prepared by Seminar in Japanese Theatre, Department of Theatre and Dance, University of Hawaii at Manoa, Fall 1994
- [9] 尾上九朗右衛門は1951年、演劇留学の往路、ハワイに上陸しており、ハワイ大学でシクレア学長に頼まれて学生による英語歌舞伎の指導をした。「元歌舞伎役者の辻田堅造の協力でハワイ大学にこの時すでに歌舞伎コースがあった」と、九朗右衛門は語っている（花田1996, pp. 20-21）。1963年には歌舞伎の演出を頼まれてホノルルに滞在したとあり（同p. 73）、これが「弁天小僧」の再演に当たる。1953年の初演には九朗右衛門は関係していないようである。
- [10] キーン誠己氏を通してキーン氏に上原の思い出をさらにうかがったところ、2017年7月14日、「上原先生は、古典はあまり得意でありませんでした、一生懸命で良い先生でした。」という答えをいただいた。

■参考文献■

- 井上修一（1995）「小間使い文学の系譜」（登張正実編『ドイツ文学回遊』郁文堂, pp. 188-209）
上原征生（Yukuo Ueyehara）訳（1940）『Songs for Children Sung in Japan』北星堂
上原征生（1955）『日系文化』彩光社。（上原征生（1955）『ハワイ随筆』彩光社）
上原征生（1975）『ハワイの声——日系米人の随想録』五月書房

- 小沢義浄編著 (1972) 『ハワイ日本語学校教育史』 ハワイ教育会
 菊池寛 (1994) 『菊池寛全集第10巻』 高松市菊池寛記念館
 ドナルド・キーン (2014) 『ドナルド・キーン 著者集 第10巻 自叙伝決定版』 新潮社
 ドナルド・キーン (2014) 『ドナルド・キーン わたしの日本語修行』 白水社
 花田昌子 (1996) 『聞き書き 尾上九朗右衛門—アメリカに移住した梨園の御曹司』 朝日新聞社
 ハワイ日本人移民史刊行委員会編 (1964) 『ハワイ日本人移民史』 布哇日系人連合協会
 堀川禪 (1980) 『伊藤整氏との三十年』 新文化社
 吉田亮 (2008) 『ハワイ日系2世とキリスト教移民教育』 学術出版社
 Harada Tasuku and Kunitomo, George Tadao: rev. by Uyehara Yukuo (1973) *Learn Japanese for English speakers*. Saphrograph.
 Uyehara Yukuo (1943) *Military Japanese*. P.D. and Ione Perkins.

【編集後記】

2017年秋号(第8号)は、全体で18名の執筆者による17編の記事を収めている。その内訳は、特集が8編、「研究最前線」が1編、論考が5編、「ことばの教育の現場から」が2編、「人とことば」が1編の、計17編である。

「ことばと文字」はその誌名に「文字」が含まれるからだろうか、原稿を依頼すると文字に関するものだけでなく考えられる方もいる。確かに文字に関する論考も毎号掲載されているが、日本語教育を含む外国語教育、日本語をはじめとする「ことば」、ことばと社会と文化など、多岐にわたる論考も掲載されてきている。

ところで、この文字の論考においては、ローマ字表記、ひらがな表記、漢字表記、分ち書きなどについて今まで論じられてきているが、まさに文字のバリエーションである。日本語初級教科書一つとっても、ローマ字表記にするか、ローマ字表記にしないか、ヘボン式か訓令式か、最初からひらがな表記にするかどうか、など色々な考えがある。この表記の多様性については、編集者自身も本誌の校正を進めるうえで毎回悩むところである。

また、表記に限らず今までの他の論考についてもバリエーションに関わると思われるものがある。たとえば、第4号の特集は「やさしい日本語」がそのテーマであった。「やさしい日本語」の対極には「むずかしい日本語」があり、その中間もいろいろ考えられるわけであり、やはり日本語のバリエーションである。

このような振り返りから、このあたりで日本語のバリエーションを特集のテーマにできないかと考え、社会言語学研究の第一人者である大阪大学の渋谷勝己氏に本号特集の企画・構成・とりまとめをお願いしたところ、快諾いただいた。そして、お忙しいなか労をいとわず本特集をまとめ、さらに各論考への道標ともなる序論をご執筆くださった。この場を借りて深くお礼申し上げます。同時に、本特集にご寄稿くださった7名の方々、そして本特集と共鳴し合う個別論考をご寄稿くださった10名の方々にお礼申し上げます。

特集の各論考の要点については序論で触れられていることでもありここでは立ち入らないが、日本語(ひいてはことば全般)のバリエーションについて示唆に富む内容となっている。バリエーション(多様性)は、豊かさ、強みであり、多様性があるということは選択肢があるということでもある。その意味で多様性を大切にしたい。

一方、クラスなどで教える場合、たとえば日本語初級クラスにおいてあれもこれもいいものとなると、学習者がかえって混乱する。その点では最大公約的な規範性や標準化が求められ、何を選択するかが重要となる。深田氏の実践報

告では、その辺のご苦労がしのげられ、どの程度までのバリエーションが許容されるのかを考えるとせられる。翻訳もそうである。蒋氏・三枝氏の論考では翻訳作業における外来語の多様性の問題が、日本語から中国語への翻訳の実例を通して論じられている。工藤氏の解説にある米国図書館目録のローマ字表記法の整備もバリエーションの対極にあるものである。

他の個別論考も特集のテーマ・内容とリンクしている。杉本氏の漢字異体字についての論考はいうまでもなく、竹井氏のカナダ在住青年の継承日本語についての論考も日本語のバリエーションを扱うものであり接点面が関わるものである。この2編はそのまますべてに含めたとし、でもそれは違和感はないのか。嶋津氏の近代ドイツの外来語排斥運動についての考察も外来語というバリエーションに政治がどう関わりつつあるかを示している。さらには、霜崎氏が取り上げていた村上春樹による欧米派表現文学試みと捉えられなくもない。秦野氏は、長年関わってこられた生涯教育における学習者支援について、多様性をキーワードに振り返りそのなかで多様な書き方の支援とそこに現れる多様な表現に言及されている。一方、河路氏の連載記事はバリエーションとは直接の関係はないが、場面がハワイ、時期が戦前から戦後にかけて、主人公が日系移民、という点で特集の平本論文と通底するものであり、両方合わせ読むことでより興味と理解が深まると思われる。

本誌の校正過程で表記の多様性にどう対処するか毎回悩むところであるが先述したとおり、正直なところ編集する立場からすれば統一したい気持ちもある。しかし、今回のテーマがバリエーションということもあり、それぞれの執筆者の思いや考えを尊重し無理には統一せず、同一筆者による同一論考内においてのみ表記の統一を計ることとした。

最後に、「一つの意味に一つの形態、一つの形態に一つの意味」(one form for one meaning, one meaning for one form)という、米国の言語学者 Dwight Bolinger (1907-1992) のことばを紹介したい。一つのことを伝えるのいくつかの表現形態(つまりバリエーション)がある場合、それぞれの形態の間には必ず何らかの意味の違いがある。辞書の意味あるいは論理の意味は同じでも、社会的、文化的、政治的、あるいは心理的な意味が加わるということだろうか。バリエーションと選択、大きなキーワードである。

次号第9号の特集は「日本語の読み書きに希望をつなぐために」をテーマとし、目や耳が不自由な人が日本語の読み書きにどう取り組み、周囲の人がそれをどう支援しているかについて当事者および関係者の方々にご寄稿いただく予定です。どうぞご期待ください。

(浜田盛男)